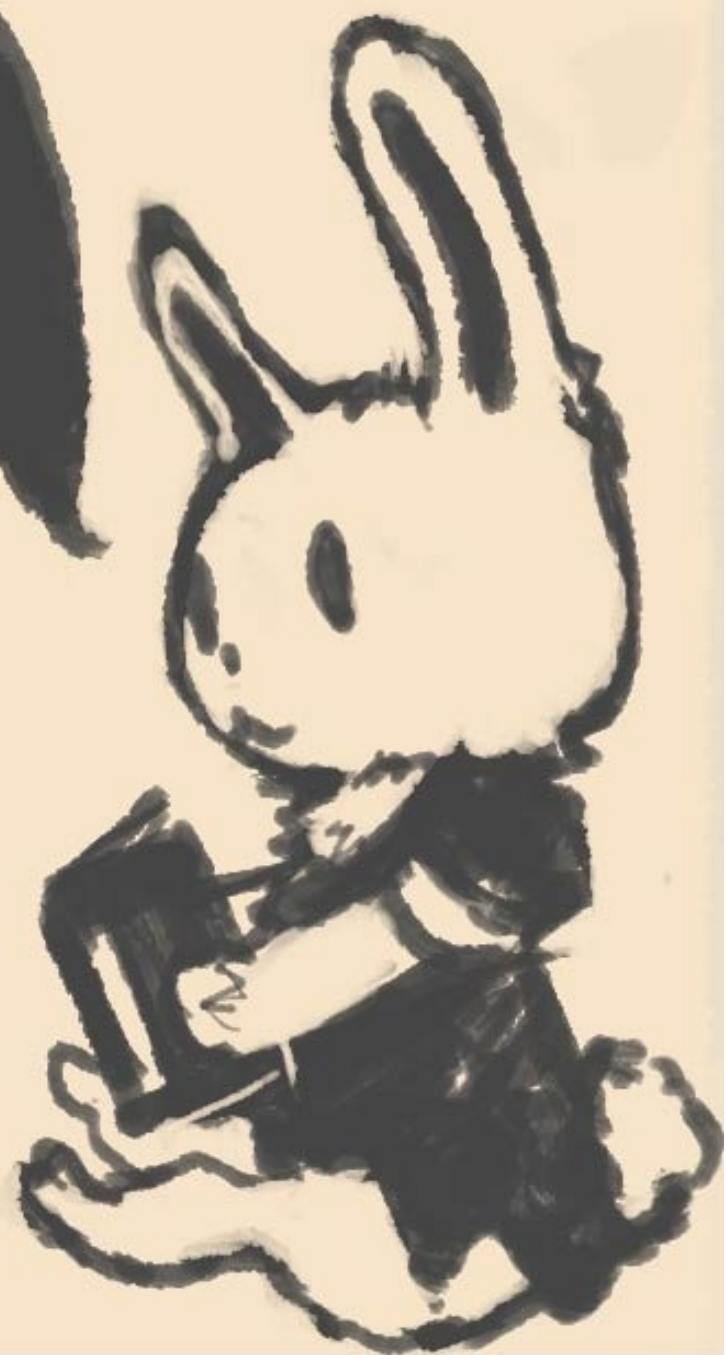


めぐぴよんの
エッセイ4



著者：めぐぴよん

飾らない言葉で書いた
エッセイ

つゆくさ

私が子どもの頃、もう四十年以上前のことですが、まだ、どこにでも雑草がはえた空き地がたくさん

ありました。

その空き地で、雑草を使って、いろいろ遊ぶのが楽しかったのを今も覚えています。

通学路の途中に、つゆくさがいっぱいはえている場所がありました。金網の柵があるので、入ることはできないけど、つゆくさの青色に惹かれて、いつもそこで時間を過ごして、花を眺めていました。

小学生の私には、つゆくさの青は大人の青に見えて、魅力的でした。

それから、人生を駆け抜けて、今はつゆくさを見ることがなくなりました。空き地がなくなったからか、地球温暖化で、はえるところが変わったのか・・・

それとも、子どもにだけ見える花だったのかもしれませんが。

ライ麦畑でつかまえて

この本は、学校の教材として読んだ。先輩に借りて一度読んだだけなので、ほとんど覚えていない。

仕事をしない主人公の少年が、崖のふちに座っていて、子どもが落ちそうになったら助けてやるようなことをしたいと考えていたということだけ、覚えている。

子どもが小さい頃、あまりの忙しさに、このことをよく思い出した。

元夫は仕事とお酒の中毒だったので、三人もの子どもをよく育てたものだと、今になって思う。うつ病になった原因も一人で三人の子育てをしていることだと先生に言われた。

苦しいとき、広い広い崖の上に、ちょうど風になびくくらいの長さの草が一面に生えていて、その崖のふちに私はのんびりと座っている。子どもたちがかけて来て、間違っただけ、脱兎のごとく飛び出して、その子を救う。毎日、毎日、私は崖に座っている。といっても、気持ちのよい柔らかい草の上に座っているのだ。子どもが来ないときも、雨の日も（子どもはこっそり出かけるのが得意だ。しかも雨の日は格別に楽しい）レインコートを来て座っている。

子どもが落ちることなど、そうそうない。私はいつも子どもをしっかりと見ていたからだ。だから、私は役に立っているのか、立っていないのか、よくわからない。それに、そんな生活をどうやって営んでいるのだろう。

この本は大人になれない少年の話だったような気がする。

ということは、私も大人になれていないのかも。

ときどき浮かんでくる草原と崖・・・心も大人になるべしと教えているのだろうか。